成田歴史玉手箱
●61回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

万治堀

干ばつから農民を救った350年前の農業用水路

善勝院にある「戸井氏の碑」

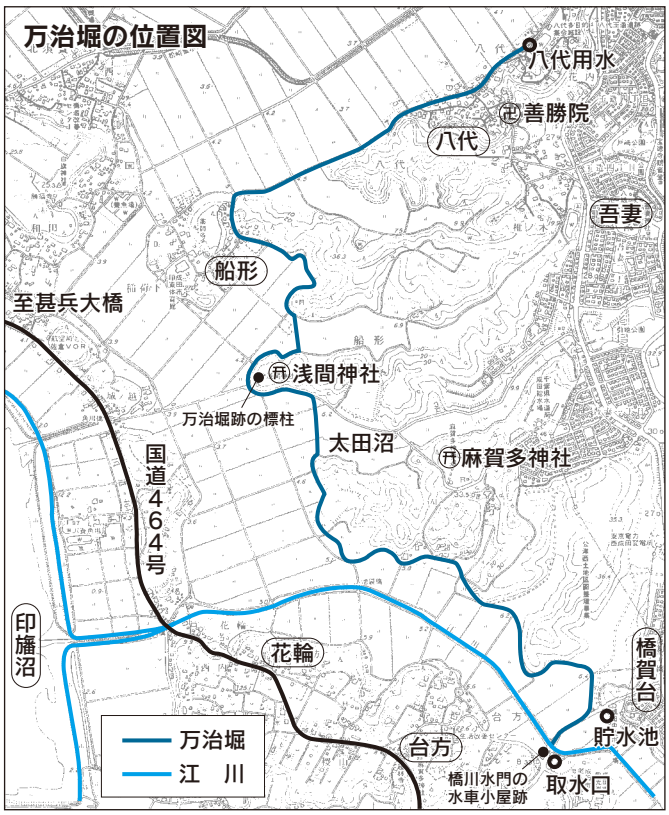
江戸時代、重税に苦しむ農民を身を呈し救った木内惣五郎。義民として語り継がれ今なお地域の人々に慕われています。惣五郎処刑の6年後、八代では干ばつに苦しむ農民を救うため農業用水路の開削に尽くした人がいました。千葉氏の遺臣戸井四郎の孫で八代村の名主・戸井四郎左衛門です。その水路は万治二年(1659)3月に完成した万治掘で地元では八代みお(みお＝溝)と呼ばれ、その功績を伝える石碑が八代・善勝院の境内に建立されています。

かつて印旛沼周辺で暮らす人々は、堤防の決壊や内水による沼の氾濫(はんらん)で辛い生活を強いられました。その一方で、沼に接しながらも耕地に利用できる水利整備が進まず干ばつに苦しむ年が度々あり、干ばつと水害が交互に繰り返されました。干ばつ対策として、ため池に湧水をため、これを耕地の用水としたことが『公津村誌』にも書かれています。

船形の浅間神社の山裾に沿う万治堀。現在残る溝は万治堀を利用した昭和の用水路

万治堀は、公津小学校から成田ニュータウンの橋賀台に通じる道路の江川に架かる橋川橋付近から、台方・船形を経て八代までの山裾(すそ)を回す全長約6.5km(右図参照)。四郎左衛門は、伊篠村(現酒々井町)の大池(おおいけ)を源流とする江川の豊富な水量に着目し、橋川橋の少し上流辺りから取水し、橋賀台入口に貯水池を作り、そこから八代に向け掘り始めました。工事は八代村の人々だけで行い、当時の算学と測量術を駆使し、わずかな落差を計算し水が流れるよう設計したのでしょう。

その結果、「旱魃(かんばつ)の年はあっても実りのない年はない。四郎左衛門の賜である」と石碑に記されています。八代では昭和の土地改良事業が行われるまで万治堀の恩恵を受け、農業を営む者にとっては彼の功績を忘れることはできないといいます。現在、用水路は船形の浅間神社下に万治堀を利用した昭和の用水路が往時を偲ばせてくれます。



編集後記

5月は連休明けから梅雨を思わせる天候が続き、イベント関係者は苦労されたことと思います。広報の写真もモノクロが多いとはいえ、やはり晴天の下で撮影したいものです。ところで、梅雨といえばアジサイの季節。市の花アジサイの名所は、甚兵衛公園・後谷津公園など市内の各所にありますが、宗吾霊堂ではことしから6月の毎週日曜日に「紫陽花まつり」というイベントが開催されています。大本堂裏手に約4,500株を超えるアジサイが咲き乱れ、箏・胡弓の演奏やお茶会も行われます。うっとうしい気分を晴らしに、一度足を運んでみてはいかがでしょうか。

JAB EMS Accreditation RE001
KHK ISO 14001 06ER・586
成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。

広報なりたは再生紙(古紙配合率100%、白色度81.5%)を使用しています。